

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K19942

研究課題名（和文）ヒューム道徳哲学と現代メタ倫理学を基盤とした道徳判断の心理的・言語的分析

研究課題名（英文）Psychological and Linguistic Analysis of Moral Judgement based on Hume's Moral Philosophy and Contemporary Metaethics

研究代表者

相松 慎也 (Aimatsu, Shinya)

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：50908829

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの道徳哲学と現代メタ倫理学に依拠しつつ、道徳判断（善悪・是非の判断）の心理的・言語的な本性について考察した。その成果として、第一に、道徳感情主義とされるヒュームにおいてさえ、道徳感情は言語によって規定されているという可能性を示すことで、道徳判断における言語の優位性を明らかにし、第二に、そのように言語ベースで成立する道徳判断には「客観的に指令的な性質」を対象に帰属させる機能が備わるが、現実世界にそのような性質は存在しえない、という可能性を示すことで、ヒュームの経験論哲学からある種の道徳的錯誤説が導き出されうること明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来のヒューム研究において等閑視されがちだった、道徳判断における言語の重要性を具体的に示し、むしろ道徳感情こそ二次的なのだという新たな解釈を提示したこと、そしてその解釈のもとに、ヒュームの錯誤説解釈を従来にない一貫した仕方で提示したことに学術的意義がある。また、近年SNSの普及により、誰もが誰に対しても容易に道徳判断を表明できるようになり、その結果、道徳判断は、客観的な装いを持つ言葉による感情的な攻撃の手段としても使えることが明るみになってきた。言語と感情の両面から道徳判断を分析した本研究の成果は、そうした道徳判断の負の側面を分析・緩和するための1つの足場となるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study examined the psychological and linguistic aspects of moral judgments, relying on the moral philosophy of the 18th-century Scottish philosopher David Hume and contemporary meta-ethics. Firstly, I clarified the primacy of language over sentiments in moral judgments by showing that even in Hume's moral sentimentalism, moral sentiments are specified by language. Secondly, I have shown that a form of moral error theory can be derived from Hume's empiricist philosophy by demonstrating the possibility that such language-based moral judgments have the function of attributing "objectively prescriptive properties" to objects but that such properties cannot exist in the real world.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：ヒューム メタ倫理学 道徳判断 感情 言語

1. 研究開始当初の背景

道徳判断(善悪・是非の判断)は、日常生活のさまざまな場面で表明・確認・反芻され、広範囲にわたって私たちのふるまいを規制しており、「円滑で安全な」社会生活の基盤をなしているように思われる一方で、近年 SNS の普及により、誰もが誰に対しても道徳判断を気軽に表明できる状況となった結果、それが正当性の装いのもとに他者を集団的に攻撃する手段ともなる、という「危険性」が身近に可視化され問題視されつつある。こうした社会背景のなか、「道徳判断とは本当のところ何であるのか、私たちはその功罪とどのように向き合うべきなのか」ということは、改めて問い直されるべき社会的課題となっている。

この道徳判断の本性と功罪をめぐる学問的研究は近年学際性を顕著に増しており、道徳心理学や進化倫理学、神経倫理学などの成立と展開のなかで、道徳判断の実態が経験科学的に暴かれつつある。そこで繰り返し主張されてきたのは、道徳判断にとっては、理性ないし合理的思考だけでなく、あるいはそれ以上に、感情的・直観的な反応が不可欠の心理的基盤をなしている、ということである。このことは、古来よりこの主題に取り組んできた哲学・倫理学においても、無視できない論点となっている。

こうした道徳判断の心理的側面における感情の役割を重視・分析した、それゆえ経験科学者からもしばしば言及される、最も重要な哲学者の 1 人に、18 世紀スコットランドのデイヴィッド・ヒュームがいる。ヒュームは道徳判断の本性をある種の感情「特殊な快苦」とし、その感情の主な源泉を「共感」、他者の感情をわがことのように感じる能力に求めた。こうしたヒュームの感情主義的な道徳判断論については、現代的なアクチュアリティもあり、哲学古典研究者による豊富な解釈研究の蓄積がある。

他方で、道徳判断が単なる内的活動を超越して実体化し、現実的な功罪をもたらすのは、それが言語によって表明されるからにはかならない。この道徳判断の言語的側面について、ヒュームは主題的に論じておらず、解釈研究上も等閑視されがちである。その代わりに、20 世紀初頭にかけての言語論的転回以降、英米圏で定着した分析哲学の流れをくむ、現代メタ倫理学では、道徳言語の文法・意味・用法をめぐって多彩かつ精緻に分析されつつある。

しかし、こうした道徳の言語的側面と心理的側面がどのように結びついているのかという点については、いまだ百家争鳴という状況にあり、たとえば、道徳言語はある種の感情を直接表現しているという見解もあれば、感情とは独立な性質を表現しているという見解もある。道徳判断の本性と功罪を論じるうえで、その両輪をなすと思われる道徳の言語的側面と心理的側面の関係について解明することが急務であると言える。

2. 研究の目的

本研究は、上述の背景のもと、

(1) ヒュームによる道徳判断の感情主義的分析を多角的に再解釈することを通して、道徳判断の心理的側面に関するヒュームの見解を明確化すること、

(2) 従来のヒューム解釈において等閑視されがちだった、道徳言語にかかわるヒュームのテキストに注目し、道徳判断の言語的側面に関する議論を析出することにより、ヒュームと現代メタ倫理学を接続可能にすること、

(3) 現代メタ倫理学における道徳言語の分析を整理・検討し、ヒューム解釈と突き合わせることに、

以上の 3 点を通じて、道徳判断の心理的側面と言語的側面および両者の関係を解明し、道徳判断の本性に関する新たな知見を提示することを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、上述の目的を達成するため、以下の研究方法を採用した。

(1) ヒューム道徳哲学の再解釈：ヒュームの『人間本性論』(1739-40)と『道徳原理研究』(1751)を主要な一次文献として読解・分析しつつ、先行研究を批判的に検討する。その際、とりわけ、ヒュームの言う道徳感情の本性と位置づけ、ならびに、その道徳言語論の内実および道徳判断と言語の関係に着目する。

(2) 現代メタ倫理学の整理とヒュームとの接続：現代メタ倫理学の文献は膨大にあるため、古典的研究は押さえつつ、とくに道徳判断の心理的側面と言語的側面を明確に区別したうえで、両者の関係を先鋭的に論じた近年の道徳的錯誤説研究を重点的に読解・整理し、道徳言語論の有力な学説を見極め、擁護・展開する。そのうえでヒュームの議論と接続し、整合的かつ相互補完的な仕方でも道徳判断理論を構築し、道徳判断の心理的側面と言語的側面およびそれらの関係を解明する。

4. 研究成果

2021年度は、道徳判断のとくに感情的側面の分析のため、ヒューム道徳哲学の再解釈を行った。ヒュームの『人間本性論』と『道徳原理研究』を一次文献として読解しつつ、ヒュームの道徳哲学に関する（主に20世紀後半以降の）先行研究を批判的に検討した。この研究を通して、従来の解釈者が正常な共感にもとづく道徳判断の分析に集中しており、共感不全の場面に注目してこなかったことを明らかにし、かつ、後者の場面を含めた場合、道徳判断の心理がどのように分析できるかを検討した。この検討を通して、ヒュームの道徳言語論が「共感」分析に対する不十分ないし不整合な補足として扱われてきたことを確認したうえで、その道徳言語論の内実とヒューム道徳哲学全体の中での重要な位置づけを明らかにした。

2022年度は、道徳判断の言語的側面の分析のため、ヒュームの研究を継続するとともに、現代メタ倫理学の資料調査・分析を行った。その中で、とくに道徳判断の実践的性質、すなわち、道徳判断と行為（その動機や理由）の結びつきの有無・程度をめぐる論争を吟味した。この研究を通して、ヒュームの道徳論には、表面上、道徳判断と行為の動機には結びつきがあり、また、近年の先行研究が指摘しているように、道徳判断と行為の理由のあいだにも結びつきがあるように見えるのだが、しかし、実際のところ、ヒュームの最終的な道徳判断論においては、これらの結びつきがいずれも希薄化・形骸化していることを明らかにした。全体としてみると、道徳判断と行為の動機には偶然的な結びつきしか確認されず、また、道徳判断と行為の理由については、概念上の結びつきは確保されているものの、それはいわば「感情の錯覚」にもとづくものであり、実質的には道徳判断のうちに行為の理由を提供するものは存在しない。以上の研究成果は日本イギリス哲学会関東部会での発表および『イギリス哲学研究』での報告において示した。

2023年度は、前年度までの研究を引き継ぎつつ、道徳判断をめぐる言語と感情の関係を包括的に解明するべく、(1) 現代メタ倫理学における「道徳的態度問題」(道徳判断の本質を感情とすると、それがいかなる感情であるか特定しがたい)の調査・整理を行ったうえで、この問題をヒュームはいかにして解決可能かを検討した。結果、「道徳判断を感情に基づかせた」と目されるヒュームの道徳判断論は、実のところ言語にこそ決定的な役割を担わせており、「道徳感情」は道徳言語の使用から想定される感情にすぎず、特定の実体をもたないことが明らかとなった。かくしてヒュームにおける言語の重要性を確認したうえで、(2) 道徳判断の言語的・概念的側面と心理的・実質的側面の齟齬を指摘する現代の「道徳的錯誤説」の調査・整理を行い、それを参照軸にヒュームを再解釈したところ、経験論的な前提に基づきながらも同様の錯誤説的構造

道徳言語は実質的な感情が満たせない客観的指令性を含意する が見いだされた。前年度までの成果と以上の成果を総合し、それぞれ(1) 欧文学術誌 *Review of Analytic Philosophy* の査読付論文、(2) 商業誌 *フィルカル* の特集論文にて発表した。

以上により、ヒュームの道徳哲学と現代メタ倫理学の接続は当初の予想以上に成功し、それらの相互補完的な分析を通して、道徳判断の言語的・心理的な本性と問題性に関する新たな知見を提示することができたと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Shinya Aimatsu | 4. 巻 3 |
| 2. 論文標題 The Fiction of "Moral Sentiment": The primacy of language in Hume's moral philosophy | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 Review of Analytic Philosophy | 6. 最初と最後の頁 63～97 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18494/SAM.RAP.2023.0003 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 相松慎也 | 4. 巻 9 (1) |
| 2. 論文標題 ヒュームの道徳的錯誤説：概念と実質の齟齬を経験論的に構成する試み | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 フィルカル | 6. 最初と最後の頁 50～81 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 相松慎也 |
| 2. 発表標題 ヒュームにおける道徳判断の規範性 動機と理由の観点から |
| 3. 学会等名 日本イギリス哲学会第110回関東部会例会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 相松慎也 |
| 2. 発表標題 道徳的配慮に値するロボット：道徳的被行為者性の可変性 |
| 3. 学会等名 第39回日本ロボット学会学術講演会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 相松慎也 |
| 2. 発表標題 因果性とは何か：言語・概念・実質の交錯 |
| 3. 学会等名 産業日本語研究会 ワークショップ（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 相松慎也 |
| 2. 発表標題 「道徳感情」の虚構性：ヒュームにおける一般的観点と道徳言語 |
| 3. 学会等名 慶應義塾大学言語哲学研究会 ワークショップ「ヒュームと分析哲学」（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 大庭 健、古田 徹也、相松慎也 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 勁草書房 | 5. 総ページ数 41 |
| 3. 書名 現代倫理学基本論文集 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| ・部会報告：相松慎也. 2023. 「ヒュームにおける道徳判断の規範性：動機と理由の観点から」, 『イギリス哲学研究』46: 114-115. |
|---|

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|